

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



一八三五年、七月王政下のフランスで、言論の自由を大きく制限する「九月法」が公布されると、国王の痛烈な風刺画で世に出たドーミエは、新たな方向性を模索する。一八三六年に始まった本シリーズでは、悪役のロベール・マケールが、銀行家や株式仲買人、押し売りなどに姿を変えて、ありとあらゆる詐欺まがいの金儲けに手を染めていく。当時の体制が公然と支持していた拝金主義を風刺することで、王や政治家を間接的に批判したのだ。本作品では、見世物小屋の入口のようなところで、様々な商品へのいかかわしげな投機を呼びかけるマケールを、相棒のベルトランが太鼓で囃し立てる。右下にはドーミエ自身の横顔が描き込まれている。

(上席学芸員 貴家映子)

オノレ・ドーミエ(一八〇八―一八七九)
『カリカチュラナ』81・金や銀、
ダイヤモンドはいらないかい?・・・
一八三八年
紙、リトグラフ、手彩色
二五・〇×二二・九cm

No.
163
2026年度 | 秋 |

暁斎を静岡に迎えて思うこと

館長 木下直之

河鍋暁斎（一八三一―一八九）は江戸・東京の人である。生まれは下総国古河（現在の茨城県古河市）だが、父が定火消同心となったため、物心つく前に江戸に引越した。江戸の暮らしが三七年、明治を迎えてさらに二二年を生き、病を得て五九歳で死んだ。

こうしてふたつの時代にまたがる人生のほとんどを江戸・東京で過ごした。しかし、静岡にも縁があった。

明治維新を迎えると、徳川將軍家は一大名として駿河に移され、多くの幕臣がともに移り住んだ。暁斎の母も沼津で暮らすことになる。明治三年（一八七二）に、暁斎は筆禍事件を起こした。貴顕を絵で侮辱したという罪で投獄された。入牢生活と笞打ち五〇の刑ですっかり身体を壊し、同四年五月から半年にわたって伊豆修善寺で療養することになった。その折に、沼津に母を訪ねている。

翌年に母は八四歳で亡くなるが、訃報が暁斎にうまく伝わらず、遅れて知

って悲しみに暮れた。母は沼津の本光寺に葬られた。のちに暁斎は亡母を偲んで碑を建て、そこに『枯木寒鴉図』を刻んだ。同図は一四年に開催された第二回内国勸業博覧会で大評判となり（百円という破格の高値で日本橋榮太樓主人が買う）、その後も暁斎は鴉図を繰り返し描いていた。残念ながら、碑は取り壊されて今はない。

沼津には旧幕臣たちを中心に兵学校が建てられた。そこで英語を教えていた渡部温と知り合い、イソップ物語の翻訳『通俗伊蘇普物語』への挿絵を頼まれた。暁斎は気が乗らなければなかなか筆を執らない。明治六年によく出版された（平凡社の東洋文庫で読める）。この年は、本の仕事が多かった。戯作者と組むことも多く、服部応賀（おうが）そのひとり、同一三年に『伊豆国修善寺温泉名所記』を出している。

話は変わって、静岡県立美術館と暁斎の縁ははなはだ薄い。というよりも美術館が薄情だった。このたびの「河

鍋暁斎の世界」展以前に、当館が暁斎を迎えたのは、私の知る限り「幕末狩野派」展（二〇一八年）で、最後の展示室に『暁斎画談』がボツンと置かれただけだった（本画ではなく）。その前は「からだのイメージ」展（一九九一年）での『骸骨図』（板橋区立美術館蔵）のみ。

静岡県立美術館は収集の柱に狩野派を立て、開館三周年を記念した「狩野派の巨匠たち」展（八九年）では、シンポジウム「狩野派における創造性」を開いたが、それを聴いた暁斎の曾孫河鍋楠美氏はこんなふうに嘆いた。「展覧会の題目が「狩野派の巨匠たち」でしたから、勿論暁斎は入れてもらえないと思っていました。図録にもパネルにも暁斎の名はなく話題にもなりませんでした」（『編集後記』『暁斎』第三九号）。

暁斎には狩野派への帰属意識が強くあった。単に狩野派に入門して学んだというだけではなく、そのことをさらに大きな構図の中に理解した。それは『暁斎画談』の表紙に「古今巨勢土佐

画 四條浮世画 南北宗唐画 北宗狩野画」と大書したことに示されている。この本は古今の画法を概観する内篇と自伝の外篇の二部構成になっている。

暁斎を狩野派の傍流に置くのであれば、逆に、本流とは何かが問われるだろう。先に述べたとおり、暁斎の人生半ば過ぎに江戸は東京に変わった。それは狩野派を支えた武家社会の崩壊を意味した。江戸城は皇居になり、大名屋敷は取り壊され、それら公共空間を装飾する「御用」を担った狩野派は雲散霧消した。

代わって到来した「文明開化」を徹底的に茶化す暁斎の戯画の世界は（それゆえ筆禍を招いた）、狩野派には収まらないように見える。しかし、必ずしもそうではないことを、私は『鍾馗騎象図』、『眠る象』、『象乃戯遊』など象図を手がかりに明らかにしようと思う（図録および会期中の館長講座）。「狩野派の巨匠」探幽の筆とされる『戯画図巻』（香雪美術館蔵）は暁斎旧蔵品だった。その中の普賢菩薩が白象に乗って鵜飼をする図は、象が曲芸を演じる『象乃戯遊』に通じるだろう。

だから暁斎も「狩野派の巨匠」だといえるのではない。「狩野派の巨匠」展から三七年目に、暁斎を迎える日が来たことをただ喜ぶたいのだ。

進化する《樹花鳥獣図屏風》

―ぬいぐるみとアニメーション―

・ぬいぐるみ

近頃、展覧会の特設ショップやミュージアムショップで、ぬいぐるみを見かけることが増えたのではないだろうか。

二〇二一年、太田記念美術館がフェリシモ「ミュージアム部」とのコラボによって収蔵品の浮世絵に登場する幻獣「虎子石」のぬいぐるみポーチを開発、その翌年には、静嘉堂文庫美術館所蔵の国宝「曜変天目茶碗」が「ほぼ実寸」でぬいぐるみ化されました。以降、ミュージアムグッズは空前的なぬいぐるみブームと言える状況が続いています。その背景には、子どもから大人まで幅広い世代に「ぬい活



図1 《樹花鳥獣図屏風》をモチーフにしたぬいぐるみ

（「ぬいぐるみ活動」が浸透していることが挙げられるでしょう。

当館を代表するコレクションである伊藤若冲の《樹花鳥獣図屏風》も、右隻の白象が「じゅかぞう」[JUKAZO]（二〇二五年二月／販売）に、左隻の鳳凰は「じゅかちよう」[JUKACHO]（今年七月／販売）として、なんとも愛らしいぬいぐるみに生まれ変わりました。ころんとしたフォルムが特徴的な「じゅかちよう」と対照的に、この夏登場した「じゅかちよう」は、さまざまな素材を組み合わせて表現された立体的な感触が、まるで作品から鳳凰が飛び出してきたようなリアルティを感じさせてくれます。お気に入りぬいぐるみをカバンやポーチにつけて持ち歩いたり、日常の風景に溶け込んだ写真を撮影したり：「ぬい活」は癒しや安心感を与えてくれるものとして、広く人気を集めています。ミュージアムグッズとしてのぬいぐるみも、作品との出合いを思い出し、より愛着を持つことができる存在となることでしょう。ぜひミュージアムショップを訪れた際には、「じゅかぞう」や「じゅかちよう」を手にとってみてくださいね。

（主任学芸員 古家満葉）

・アニメーション

この夏、当館に忍者たちがやってきました。

エントランスホールで上映したのは、アーティスト・井上涼さんによるアニメーション「忍者も樹花鳥獣図屏風に入りたい」。開館四十周年を記念し、当館から井上さんに制作を委嘱した新作です。物語の舞台は当館。井上さんの作品ではおなじみの忍者Bと忍者Cが来館し、念願の伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》にご対面。「柘目描」による鮮やかな情景に感動した忍者Cは、絵の中の世界に仲間入りしたい、と願います。すると、画面から白象と鳳凰が現れ、彼らを「入団テスト」へ招待します。果して彼らは無事に仲間入りを果たすことができるのでしょうか…。

ご存知の通り、井上さんは、NHK Eテレ「びじゅチューン」(二〇一三～二〇二六)において、作画、音楽すべてを自身で担当したアニメーションにより、美術作品の魅力を親しみやすく視聴者に伝えてきました。同番組で放映された「樹花鳥獣図屏風事件」(二〇一四年)

では、画中の生きものたちが、軽快な歌とともにミステリードラマを繰り広げます。この「事件」は話題を呼び、《樹花鳥



図2 「忍者も樹花鳥獣図屏風に入りたい」の一場面 ©INOUE Ryo 2026

獣図屏風の人気が、子どもたちにまで広がる契機となりました。

そのよう
なご縁もあり、今回も《樹花鳥獣図屏風》を取り上げて

した。当館からお願いしたのは、「柘目描」に注目してもらいたい、という一点だけ。それが井上さんの手にかかる、と「柘目描」の世界に入っていくというストーリー、ユニークな「柘目化」の描写、さらに一度聴いたら耳から離れない楽曲「樹花鳥獣図屏風理念」によって、「柘目描」の面白さが実に楽しく伝わる作品となりました。井上さんには制作のために、展示中の実物はもちろん、当館展示室の内装や設備なども取材いただきました。作中にしっかりと反映されていますのでお見逃しなく。

夏休みということもあり、子どもたちをはじめ、多くの方がスクリーンに見入っていました。本作は井上さんのYouTubeチャンネルでも公開予定です。展示で忍者たちの冒険を楽しんだ方も、見逃してしまった方も、ぜひご覧ください。

（上席学芸員 浦澤倫太郎）

企画展

ゴールドマン コレクション

河鍋暁斎の世界

2026年10月10日(土)ー12月6日(日)

幕末から明治にかけて活躍した画家・河鍋暁斎は、一八三一（天保二）年、下総国古河の藩士の家に生まれました。幼い頃から絵に親しみ、一家で江戸に移った後、一八三七（天保八）年に歌川国芳入門。その後、駿河台狩野派の前村洞和、ついで狩野洞白陳信に学びました。狩野派で培った確かな技術を基盤に、ユーモアや諷刺に富んだ独自の画風を切り拓き、絶大な人気を博します。「画鬼」と称された暁斎は、一八八九（明治二二）年に没するまで、旺盛な制作活動を続けました。

江戸・東京で活躍した暁斎ですが、静岡県とゆかりがあることも知られています。暁斎の母・とよは、晩年、沼津に移り住んでおり、一八七二（明治四）年、

暁斎はこの母に会うために沼津を訪ねます。さらに、前年の投獄によって疲弊した心身を癒すため、修善寺温泉まで足を延ばしています。沼津や修善寺では、多くの人々と出会い、彼らとの交流はその後長く続くこととなります（詳細は本誌p.2館長の記事をご覧ください）。

暁斎の画風は、日本人だけでなく、同時代の外国人からも人気を集めていました。暁斎のもとには、フランスのギメ美術館の創設者であるエミール・ギメをはじめ、多くの外国人が訪れています。その中でも暁斎と特に親しかったのは、英国出身の建築家で、日本で活躍したジョサイア・コンドルで、暁斎に入門し、絵を学びました。生前から外国人と交流し、欧米でもその名が知られていたという点で、暁斎は日本人の画家としては先駆的な存在であったと言えるでしょう。

その暁斎の没後、約一世紀を経た一九八〇年代初頭、ロンドンで一人の若き美術商が、コンドル旧蔵の《半身達磨図》（図1）と運命的な出会いを果たします。この美術商こそ、本展のもう一人の主役、イスラエル・ゴールドマン氏でした。ゴールドマン氏はこの絵が放つ「崇高なオーラ」に魅せられ、同作品はゴールドマン・コレクションの第一号となるのです。その後、精力的に作



図1 《半身達磨図》
写真協力：立命館大学アート・リサーチセンター



図2 《地獄太夫と一休》
Photo: Ken Adrald

品収集を続け、やがて世界屈指の暁斎コレクションを築き上げていきます。

二〇一三年には暁斎コレクターとして知られた福富太郎氏から、《地獄太夫と一休》（図2）をはじめ、優れた暁斎作品をまとめて入手し、コレクションはいつそう豊かなものとなりました。

これらの作品の大部分は、大英博物館に寄託され、研究や展示に活用されています。また数々の展覧会にも貸し出され、暁斎の画業を広く紹介し、その評価を高めることに貢献してきました。

た。二〇二二年に、ロンドンのロイヤル・アカデミーで開かれた展覧会は大きな注目を集めました。

本展では、ゴールドマン氏のコレクションから選りすぐった約一〇点の作品をご覧いただけます。ゴールドマン氏による近年の収集活動の成果が反映されたラインナップとなっており、その半数以上が日本初公開となります。時代や国境を越えて愛される暁斎の魅力を存分にご堪能ください。

（上席学芸員 浦澤倫太郎）

※掲載の作品は、いずれも作者は河鍋暁斎、所蔵はイスラエル・ゴールドマン・コレクション

収蔵品展

山水画の名品

2026年10月10日(土)―12月6日(日)

県立美術館では、東西の風景画をコレクションの中核に据え作品を収集してきました。なかでも日本絵画においては、富士山などの実景を描いた真景図や、理想の風景を表現した山水画を数多く所蔵しています。本展では、開館40周年を記念し、この収蔵品を中心に、狩野探幽、狩野山雪、池大雅、谷文晁、浦上玉堂ら、江戸時代を代表する画家たちが手がけた山水画の名品をご紹介します。

山水画は、中国で発達した絵画ジャンルで、日本では室町時代頃から本格的に描かれるようになります。また、中国絵画の影響を受けながら、格式ある画題として定着し、掛軸や卷子だけ

でなく、寺院や武家屋敷などの障壁画にも描かれるなど、流派を問わず多くの画家によって手がけられました。

山水画に描かれるのは、その名のとおり山や谷、河川などを伴う自然の風景ですが、必ずしも実景をそのまま再現した絵画ではありません。むしろ多くの場合、画家が心のなかに思い描いた「理想の風景」が表現されています。そのため、現代の私たちにはなじみの薄い中国風の険しい山々や、画面に書かれた漢詩などから、難解な印象を受けることもあるでしょう。とりわけ水墨山水画は、一見すると似たような作品に見えるかもしれませんが、しかし、そこには画家それぞれの豊かな想像力と美意識が息づいています。筆遣いや構図、彩色、余白の生かし方などに目を向ければ、作品ごとに異なる個性と魅力が浮かび上がります。絵のなかを旅するように眺め、描かれた人物から物語に思いを巡らせることも、山水画を味わう楽しみの一つです。本展では、画家たちの関係性に着目し、「ライバル」や「家族」といった視点から作品を見比べて、それぞれの表現の違いを探ります。

まず取り上げるのは、幕府のお抱え絵師として画壇を牽引した狩野探幽と、京で独自の画風を築いた狩野山雪



狩野探幽《瀟湘八景》(八幅の内、一幅) 静岡県立美術館

です。同じ狩野派でありながら、探幽は余白を巧みに生かした軽やかで洗練された表現を追求し、山雪は理知的で幾何学的な構成によって独特な世界を築きました。このほか、十八世紀後半の狩野派を代表する狩野栄信や、新たな山水表現を切り開いた谷文晁にも注目します。

また、家族同士の比較では、池大雅・玉瀾夫妻、岡田米山人・半江父子、浦上玉堂・春琴父子を紹介します。近い家族という関係のなかで、互いに技法や美意識の影響を受けながらも、そ



谷文晁《連山春色図》 静岡県立美術館

れぞれが独自の表現を追求しました。ここで紹介する画家たちは、文人画家として知られ、中国の文人を理想としながら、自らの内面や精神性を重視した表現を目指しました。既成の様式にとらわれない自由闊達な山水画は、こうした文人画家たちの個性によって豊かに展開していきます。

さらに、谷文晁門下の村松以弘に学んだ福田半香や平井顕斎など、同じ師のもとで学びながらも、それぞれ異なる山水表現を展開した地元静岡の画家にも目を向けます。

作品を見比べることで浮かび上がる、画家たちの個性と表現の違い、その山水画の奥深い魅力をご堪能ください。

(上席学芸員 薄田大輔)

※会期中一部展示替えがあります。

すみの え ぶ ぜん ふ ようほうさいけんの ず
墨江武禅《芙蓉峯細見之図》
 (静岡県立美術館蔵) 再考

上席学芸員 浦澤 倫太郎

文化三(一八〇六)年没。近年、大坂の唐画師の一人として研究が進められている。

本作は、富士山を急峻な円錐形として表し、鳥瞰的に捉えたものである。山頂から山腹にかけて、登山道や石室などが描き込まれている。五合目以下は霞によって大幅に短縮され、下辺右より吉田、須走、須山の各登山口が配される。水墨を基調とし、中腹以下の植物などに彩色を施す。全体として、筆致や造形にはやや素朴な傾向が認められる。画面右上の自賛、各所の注記により、作者自らの富士登山の見聞を反映したものであるとわかる。富士山図と文字の組み合わせは、江戸時代に各登山口で頒布された登山案内図を想起させるが、登山道の大幅な省略など、案内図には余りない特徴も有する。

これまで当館では、筆者も含め、本作を武禅作品として展示・紹介してきたものの、美人画・山水画が中心の武禅の画業の中では異色と言えよう。そこで本稿では、本作を再考する材料として、自賛・注記に着目する。これらへの言及は、これまで部分的なものに留まっていたが、本稿では全翻刻を掲載し、その内容および描写との関係进行分析し、本作の成立背景を考察する一助としたい。

※次の①～⑬の番号は、図版上に記した番号と対応する。読点は筆者が適宜補った。文中の「」は改行または行頭の移動を示す。

- ①芙蓉峯細見之図／「梁阿」寛政十年同十一未歳／二度登山、管見少億(マ)持其一鷹、未見爲人染拙毛、有好事者潤色補之／此峯都八葉、亦世二有^人穴物南西ノ方吉田口ヨリ八里、大宮ヨリ近シ、其余ノ難書畫略之、凡六月初日ヨリ七月廿ノ三日頃迄登山ス、依年時不準、武禅墨江道觀ノ記寫(白文方印「武禅」)
- ②薬師嶽
- ③社家者説／此華咲也姫ノ尊ヲ祭云云、仙元大菩薩ノ鎮座ノ内輪空虚深ノ數十丈、雲霧風ノ多出此内、

④大日嶽ノ大宮ヨリノ登者此ノ處ニ至ル、金銘水ノアリ、

⑤千間ノ嶽、須山ヨリ登ル者ノ此テウシ口ト処ニ至ル、銀銘水トアリ、

⑥吉田ヨリノ登路上ニ至ノ駒ガ嶽経ガノ嶽ト云アリ、駒ノガ嶽ハ聖徳ノ太子ノ古跡、又ノ経カ嶽ハ日蓮ノ上人ノ古事ナリ、又鎌岩ト云モアリ、五六合目ヨリノ八合目迄堀ノ如ク厚ク切立ノタル岩モアリ、

⑦八合目ノ此處ヨリ吉田ト須走ヨリ別道、七合目ノ六合目ノ五合目ノ此處ヲ砂ノ拂ト云、下向ノ者多クハワランジヲハキカユル、

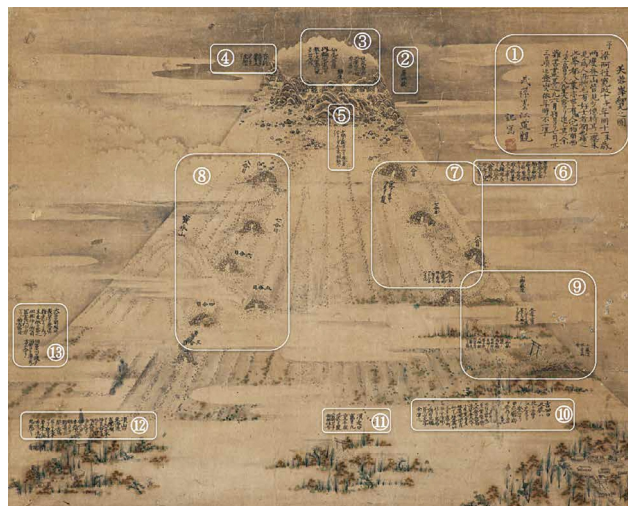
⑧八合目ノ七合目ノ六合目ノ五合目ノ四合目ノ三合目ノ寶永山

⑨小御嶽道ノ此邊ニ富士ノリンゴトテ異ノ果アリ、御山ノリンゴトモ云、小御嶽ノ権現ノ鳥居額ノ有、但岩ノ長姫ノ尊ヲ祭ト云、俗説ノ大山石尊ノノ奥ノ院ノナリ云傳、小嶽道ノ北方十町ノ余ノ吉田口ノ此處ハ北二當テノ江戸方ヨリノ登口ナリ、甲州鶴ノ郡ヲ郡内ト云、吉田ノ(本紙欠損)ノ御師多ノ居住ス、四口ノ中ニハ第一繁榮ノ地也、又此登口五合目ノ迄草本大茂リノ小屋室等多、坂道嶮阻ナレトモノ砂ナシ、珍木異艸ノ又多シ、吉田ノ町ノ端ニ下浅間ノ社アリ、鳥居ノ額有三國ノ第一山文字、余準之、

⑩須走口ノ吉田口ヨリ凡ノ二里半程、此處ヨリ麓ノ二在町アリテノ御師住居、

⑪須山口ノ東海道ノ吉原驛ノヨリ入、十里木ノ路トモ云、古モ通ノ路アリシガ中ノ頃ハ大宮トノ須走ヨリノ留ケルガノ亦此頃ノ關ヲキテノ新道トナル、麓ハ大篠ノ原ニテ大木アリ、登山道ハ草木ナシ、但ノ希有ハ虎杖トノ鬼冤ナリ、

⑫大宮口ノ南駿河ノ表口ナリ、登山道ハ難處ナリト云、予ノ未至依テ略之、但御師ノ惣司ノ富士長門守ト者ノアリ、称大宮司、但富士川



墨江武禅《芙蓉峯細見之図》
 掛幅装 紙本墨面淡彩 53.0×65.6cm

※拡大図を含む画像を当館デジタルアーカイブで公開

ヲ渡テノ河原ヨリ直ニ左ノ方ニ入ナリ、

①冒頭の「梁阿」は、文脈と「予」と添えられる点から、作者自身を指す可能性はある。しかし、武禅がどのように名乗った例は他に見当たらない。さらに寛政十、十一年に登山し、その時の記憶を頼りに本作を描いたと続けるが、この時期の富士登山を傍証する史料の存在は明らかではない。「人穴」は現在の富士宮市にある溶岩洞穴で、富士山信仰の聖地。ここで述べられるように吉田口からは八里ほど(約3.6km)離れ、大宮口に近い。そして、年毎に異なるものの(旧暦)六月一日より七月二十三日頃までが登山期間であると結ぶ。署名に「道観」とあるが、『浪華郷友録』(安永四(一七七五)年、寛政二(一七九〇)年)や『装剣奇賞』(天明元(一七八二年))といった武禅在世時の書籍、そして管見の限りではあるが、他作品の印章における表記では、いずれも「道寛」または「寛」

である。伝記等で「道寛」ではなく「道観」とする表記は、武禪没後に成立した白井華陽『画乗要略』（天保三「一八三二」年）の武禪伝が発端とみられる。署名の書風は類例のない特徴を有し、朱文方印「武禪」も、他に使用例を発見するには至っていない。

山頂には、岩塊の合間に石室が並ぶ様子が描かれ、その後ろに地名などが記される。②の「葉師嶽」は、吉田・須走口頂上付近に位置する現・久須志岳を指すと考えられる。③では木花咲耶姫が祭神であるとする社家の話を載せ、火口の地形を記述する。木花咲耶姫は、近世の浅間信仰において富士山の神として広く定着していた。④の「大日岳」は、現在では一般に吉田・須走口頂上付近の峰を指すが、「富士山須山口略絵図」（江戸時代、富士山かぐや姫ミュージアム蔵）では、本作と同じく大宮口頂上付近の峰が「大日ガタケ」と記される。「金銘（明）水」は山頂にある井戸で、後述の「銀銘（明）水」とともに、その水は富士山信仰において珍重された。ただし、金明水は実際には大宮口頂上から離れた現・白山岳付近に位置するため、この記述には齟齬が生じている。

⑤は須山口頂上の「テウシ（銚子）口」に関する記述。「銀銘水」は同地にある井戸。冒頭「千間の嶺」は現・駒ヶ岳あるいは現・浅間大社奥宮禁足地の峰を指す「浅間ヶ嶽」に通ずるか。付近には、銚子口にあった半鐘と現・駒ヶ岳に掛けられていた梯子が描かれている。

⑥では吉田口登山道に実在する地名が列挙される。「駒ヶ嶽」は八合目付近、「経ヶ岳」は五合五勺・鎌岩尾根は七合目一帯にある。また「五六合目より八合目迄」厚く切立タル岩」とあるが、実際の登山道でも特に七、八合目には岩場が続く。

⑦は吉田口登山道の合目を中心に記す。各合目には石室、その間を九十九折の道が結ぶ様子が描かれるが、八合目付近には、麓に向かって吉田口と須走口が分岐する旨が添えられる。五

合目付近の「砂拂」は、現在では一般に須走口の五合五勺を指すが、江戸時代には吉田口の五合目付近も同様に呼んだ例がある。

⑧は須山口登山道の合目を記す。登山道と石室に加え、その脇に宝永山も描かれている。

⑨の「小御嶽道」は、吉田口登山道より分岐する小御嶽神社（祭神は警長姫命）への参道で、後半の「小御嶽権現」は、同社を指す。本作では鳥居のみが描かれる。同社は享保以降に相模の大山石尊から勧請したものとされ、大山の「奥院」とも称されたようだ。現・富士スバルライン五合目に位置し、本作の述べる通り、登山道からは十町ほど（約1km）離れている。「富士リンド」は「御山リンド」は、コケモモの富士山周辺での呼称と考えられる。浜梨とも呼ばれ、吉田口では、本作の示す通り五合目付近に群生する。東海道原宿の植松家では、「富士濱梨」が訪問客にたびたび贈られていた。

⑩は吉田口について記す。江戸から訪れやすく、郡内とも呼ばれる都留郡に位置し、御師が多く住み、四つの登山口の中で最も栄えていたと、基本的事実を述べる。「下浅間」は、本作に描かれる北口本宮富士浅間神社を指す。現在とは異なり、江戸時代には同社を「下浅間」「二合目の御室浅間神社を」「上浅間」と呼んだ。「三國第一山」の扁額は、現在も北口本宮富士浅間神社の鳥居に掲げられている。

⑪は須走口に関して記し、吉田口から二里半（約10km）離れているとするが、実際の各浅間神社間の道のりはこれをやや上回るか。他には集落があり、御師が住むと記述するのみである。⑪上方には須走口登山道自体は描かれるものの、石室の描写や他の注記はなく、両隣りの吉田口と須山口に比して簡略である。

⑫の須山口に関する記述は興味深い。「亦此頃關ラキテ」という表現は、寛政頃を基準とすると、宝永四（一七〇七）年の噴火による同登山道の寸断、および安永九（一七八〇）年頃の復興という経緯と合致する。さらに、麓に笹

原が広がり、「登道」にはイタドリなど先駆植物がまばらに生えている様子など、植生についても記す。「鬼鬼」は不詳である。

⑬では、大宮口を未訪問であるため、詳細な説明は省略すると述べる。「御師ノ惣司」とされる「富士長門守」は、富士山本宮浅間大社の神職・富士氏を指すと考えられる。

以上、本作の賛文や注記の内容を中心に分析した。関係史料や地形と照合すると、吉田、須山の各登山道については、寛政十年前後の状況の説明として概ね整合的である。また、大宮口に関しては伝聞調で記され、不正確な箇所がある点も、同登山道を通過しなかったことと矛盾しない。登山道とその周辺の歴史、地理、植生などの記述については、一定の意義が認められると言えよう。一方、落款の署名の表記などに鑑みれば、武禪自身の制作への関与については、現時点では慎重な判断を要する。今後、関連する作品・史料との比較・検討などによって、本作の成立過程を明らかにしていくことが課題となる。

- 1 岩佐伸一「概説 墨江武禪と林間苑」千葉市美術館・大阪歴史博物館編『唐画もんー武禪に関美、若冲も』展図録、平成二七（二〇一五）年
- 2 伊藤紫織「江戸時代の唐画―南蘋派、南画から南北合派へ」春風社、令和五（二〇二三）年
- 3 松平定能編『甲斐国志』卷之三十五山川部第十六上、文化十一（一八一四）年成立
- 4 奥脇和夫「解説 富士山の絵札」（富士吉田市歴史民俗博物館「富士山の絵札―牛玉と御影を中心に」展図録、平成八（一九九六）年
- 5 小野蘭山『探品録』（文政五「一八二二」年）の「コケモモ」項に「不二山亦多シ、方言御濱ナシ又ヤマリンド」とある。
- 6 沼津市教育委員会編『沼津市史叢書三 原宿植松家日記・見聞雜記』沼津市教育委員会、平成七（一九九五）年
- 7 『甲斐国誌』卷之七十一「神社部第十七上には「小室ヲ上浅間ト云、此祠ヲ下浅間ト稱スルハ本小室ト同社ノ謂ナリト云、又下吉田ニ浅間アリ是ヲハ下ノ宮浅間ト稱ス」とある。
- 8 静岡県富士山世界遺産センター編『富士山巡礼路調査報告書 須山口・御殿場口登山道』、令和七（二〇二五）年

富岡多恵子 青春絶望音頭

本の窓

富岡多恵子著
『青春絶望音頭』

角川文庫 一九七五年
（一九七〇年刊行の単行本と同様に、表紙装丁は一九六九年に結婚した菅木志雄が担当）

大阪出身の詩人・小説家、富岡多恵子（一九三五～二〇二三）が、生い立ちから青春時代を振り返った自伝的エッセイ。二十四歳の頃、教師の職を辞め、妻のある池田満寿夫と駆け落ちし、新宿近くで貧しい同居生活を始める。しだいに版画家として評価を高めていった池田とともに渡米するが、約七年に及ぶ関係はアメリカで終わりを迎えた。池田との暮らしを通じて富岡は、創造的な仕事をする男女が一つ屋根の下で生活するなかでの葛藤や、生活のなかで「シゴト」として詩を書くことの困難に直面する。一方、食べるための「シゴト」として絵を描き、その結果としてつぎつぎと「ゲイジユツ」を生み出していくタフな池田の姿からは多くを吸収した。女性が自立して表現活動を行うことが現代ほど一般的ではなかった一九六〇年代に、表現者としてのあり方を模索する富岡の内面がうかがえて興味深い。

（上席学芸員 川谷承子）

問いを抱えて

エデュケーショナルスタッフ 内野 友恵

絵を学び始めた頃の私は、思い描いたものを思いどおりに描けるようになりたいと考えていました。技術を身につければ、自分の表現はもっと自由になる。そう信じて、描き続けていました。

けれど、不思議なものです。描けるようになるほど、「どう描くか」よりも、「何を描きたいのか」が分からなくなっていきました。技術は答えを与えてくれるものではなく、問いを深くしていくものだったのです。

良い作品をつくらうと手を動かそうとするも、何も見つけれず、何度も制作から離れようと思いましたが、それでも筆を置けなかったのは、制作の途中で出会う偶然が魅力的だったからかもしれません。水の流れが思いがけない表情をつくること。素材



制作の様子

が予想とは違う応え方をする。あるいは、自分でも気づいていなかった感情が一筆ごとに少しずつ姿を現すこと。ときには、遠い時代の作家が見つめていたものと、自分の感覚がふと重なる瞬間があります。そうした偶然との出会いが、私にとって作品をつくる欲びなのだと思います。

新しい職場に来て四か月。実技室では子どもたちが夢中で手を動かし、創作週間では多くの参加者の皆さんが、自分の表現と静かに向き合っています。その姿に触れるたび、「つくりたい」という衝動は年齢や経験を超えて人の中に息づくものなのだと教えられる。同時に、その純粋さに励まされ、自分自身もまた制作へと背中を押されています。

人はなぜ作品をつくるのでしょうか。私は、いまだにその答えを知りません。ただ一つ確かなのは、気がつく手を動かし、何かをつくってしまったという事です。

美術館には、今日も誰かが生み出した作品と、その背景にある「つくつてしまふ」という思いが息づいています。その思いに触れながら、一人ひとりが安心して表現に向き合える場を育んでいくこと。そして私自身もまた、一人のつくり手として問いを抱えながら歩んでいきたいと思っています。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館)
年末年始
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

ロダンウィーク 2026

毎年恒例のロダンウィーク、今年もイベントが盛りだくさん！
期間中はロダン館と収蔵品展が無料で鑑賞いただけます。

2026年10月30日(金)・31日(土)・11月1日(日)・3日(火・祝)
※11月2日(月)は休館日

【主なイベント】(予定)

アダッド・ハナ氏講演会

10月31日(土) 14:00-15:00 助成：NOMURA 野村財団
会場：ロダン館 申込不要/参加無料/定員：約50名
オーギュスト・ロダンを重要なモチーフとして制作するカナダ人アーティスト、ハナ氏のこれまでの制作から生まれた思考や作品の見方を通して、ロダン彫刻の新たな魅力に迫ります。

友の会40周年記念講演会

対談「絵を愉しむ—屏風・掛物・画帖の魅力」

11月1日(日) 14:00-15:30

会場：講堂 申込不要/参加無料/定員：200名
講師：神原悟氏(岡崎市美術館館長・おかざき世界子供美術博物館館長、群馬県立女子大学名誉教授)、木下直之(当館館長)

※その他イベント詳細はチラシまたはウェブサイトでご確認ください。

わたしたちは、静岡県立美術館開館40周年を
応援しています

〈コアサポーター〉

IAI
Quality and Innovation

A アイワグループ

Shizu
tetsu

Hagoromo はころもフーズ

画にいろどりを、人にとときを。

村上開明堂

〈サポーター〉

Suzuyo